

—我が家のルーツについて—

阿川紘一郎

1・我が家のルーツについて

私の両親は三重県出身で、本籍地は長い間三重県にあった。子供が多く、入学等で戸籍謄本が必用の都度、三重県の役所に連絡をして手数料を送って取り寄せていたが、これも面倒になり本籍を函館に移したのが、昭和30年代であった。

父が生前良く話しをしていた「阿川家」は、源平時代まで遡ることができ、当時伊勢の国藩主「藤堂高虎」に仕え、石高350石の藩の馬廻り役であったと聞いていた。

その当時を偲ぶ物として、馬廻り役時代（1600年前後）の「阿川家」の旗や、その当時使用していた槍の先が現存している。

（但し、後年槍の先だけを短刀の様に改装してある。）

また、その馬廻り役時代に剣道を極め、藤堂高虎藩の武道の師範を務めていた「塚原卜傳」の免許皆伝の書状も現存している。（父が表装してある。）

この様な事から、我が「阿川家」についてルーツを少し調べてみた。

2. 「阿川」発祥の地

阿川家は、現在の山口県豊浦郡豊北町で、当時は長門国豊浦郡阿川が発祥である。この地には清和源氏と宇多源氏の二系統があり、清和源氏の阿川氏は、足利義尚の弟と言う盛豊が祖である。子は大内政弘に仕え、八城村（現在の埼玉県草加市、八潮市）に居住した。

一方宇多源氏の阿川氏は、佐々木定綱の孫秀綱が阿川を領して阿川氏を称したと伝えられている。そして五代弘綱以降は代々大内氏に仕えた。

現在は阿川姓の多くは山口県を中心に中国地方西部に多いが、東京・日野市から八王子市にかけても集中しているとの事である。

3.伊勢の国

はたして現在の我が「阿川家」は、清和源氏系か宇多源氏系かは定かでは無いが、いずれにしても長門の国から移住したときに、一派は四国へ、一方は伊勢の国へ移住している。

四国には以前「阿川」なる地名はあったが、現在は残っていない。しかし村名として高知県に「吾川村」があったが、平成 17 年の合併により、仁淀川町となってしまった。徳島県名西郡神山町阿野には「阿川梅の里」があり、ここには阿川公民館、阿川小学校が現在存続している。

我が「阿川家」の先祖は伊勢の国へ移住し、「藤堂氏」に仕える事となった。この「藤堂氏」は、四国征伐にも功を挙げていることからしても、「阿川家」と四国の繋がりもまんざらでも無いように考えるのは、うがった見方だろうか。

さて「阿川家」が仕えた藤堂高虎（1556～1630）は、築城の名人と言われた人物で、四国の宇和島城・大洲城・今治城・伊勢の津城・伊賀上野城や名古屋・彦根・姫路・大阪・伏見城など 15 に及ぶ築城に関係したと言われている。

我が「阿川家」は、この藤堂家の「馬廻り役」として仕え、350 石の石高を拝していた。

阿川家に関係があったと思われる人物で、歴史上名を残している人物は次の 3 名がいる。

*阿川延実（1848～1866）

彼は徳川末期の志士で萩藩士である。萩藩と言う事は阿川発祥の地であるが、25 才の若さで没している。

*阿川光祐（1845～1906）

幕末の志士で、伊勢菰野城下で生まれているので、我が家に一番近い人物と思われる。維新の際には国事奔走して、名を知られた人物との事。

明治に入り廃藩置県後、愛知・熊本を歴任し、後に台湾総監府事務官となった人物で、人格高潔であったとされている。

*阿川義弘（江戸時代後期の国学者・歌人）

徳川中期の歌人で、伊勢の国に生まれている。この事からも我が家と関わりの有りそうな人物で、通称“玄蕃”と言ひ、「松蔭閑話」の著がある。

4. 現在の「阿川家」

私の父は昭和 60 年に亡くなっているが、生前は会社（缶詰会社）を経営する傍ら茶道や謡曲をたしなみ、特に謡曲はお弟子さんも多数おり、NHK が渋谷に放送会館を造った時に、その能舞台のこけら落としに仕舞いを舞った事が、また民間人として勲五等双光旭日章を叙勲したのも自慢の一つだった。

正月を迎えると我が家は、父は 1 月 2 日に謡曲の初謡をし、更に父は裏千家、母は表千家と流派は異なっていたが、茶道の初釜を家で開いていたのは、その昔我が家が仕えた藤堂高虎の、文武両道の精神を受け継いだものだったかも知れない。

5. 終わりに

私は大学 1 年の春休みに、山口県の我が家の発祥の地「阿川」を尋ねた事があった。

下調べもせずに JR「阿川」で下車し、多分その昔は我が家と繋がりがあつたであろう「阿川さん」を訪ね、色々先祖の話しを聞いた事があつた。

父が亡くなった昭和 60 年に、我が家の家系図を見たことが有つたが、その後その行方が知れず、時間にも余裕がある今その家系図を探し出し、我が家のルーツをもう少しはっきりさせたいと思っている。

以上